

発達障害をもつ子の自立にむけた生活スキル習得の 試み -発達心理学の視点から-

著者	堀 篤実
雑誌名	東邦学誌
巻	41
号	3
ページ	89-103
発行年	2012-12-10
URL	http://id.nii.ac.jp/1532/00000289/

発達障害をもつ子の自立にむけた生活スキル習得の試み
—発達心理学の視点から—

堀 篤 実

愛知東邦大学

発達障害をもつ子の自立にむけた生活スキル習得の試み —発達心理学の視点から—

堀 篤 実

目 次

- I 動機と目的
- II 調査方法
 - 1. 調査対象
 - 2. キャンプの概要とお手伝いプログラムの内容
 - (1) キャンプの概要
 - (2) お手伝いプログラムの内容
 - 3. 調査用紙の構成
 - 4. 倫理的配慮
- III 結果
 - 1. 生活スキル各項目の変化
 - (1) 各項目の度数分布
 - (2) 各項目の得点平均値および標準偏差
 - 2. 生活スキル得点の変化
 - 3. 内容別スキル得点の変化
- IV 考察
- V おわりに

I 動機と目的

障害のある人が社会で豊かな生活を送るためにはさまざまなスキルが必要であり、地域生活スキル (community living skill) や家庭生活スキル (domestic skill) への注目が高まった [1] [2]。そのため、例えば、家庭生活スキル [3] [4] や買い物スキル [5] [6]、最近では携帯番号利用スキル [7] など多様なスキルの検討がなされてきている。

さまざまなスキルを習得することは、子どもたちにとってただ単にその行動ができるようになるということだけではなく、他の人の支援を受けることなく、自由に行動できる世界が広がり、その達成感や自信が他の場面での意欲や生活全体の充実に繋がっていくものと考えられる。

私たちが技術を学ぶときには三段階があると言われている [8]。第一段階は、ある技術について、このような技術があると気づく時期であり、技術の発見期と呼ばれる。次の時期は、必要に迫られ、あるいは興味に動かされて技術を学ぼうとする時期であり、技術の習得期と呼べる。三段階目は型から学んだものを自分仕様に仕立て直す時期で転心期と言われている。この時期に

なると、見よう見まねの技術の習得ではなく、その場や状況に応じて、自分に最適なものに変えていくことが可能となり、上手にやろうと、素材・道具・環境などにも目配りができるようになる。標的行動の実行機会を自ら設定し、指導された標的行動をプロンプトなしに実行することは般化と呼ばれているが、第三段階になると日常生活の様々な場面において、般化がおこなわれているものと考えられる。発達障害をもつ子どもがスキルを身につけていくためには、個別に各々のスキルに対し、どの段階にいるのかを見極め適切な場面を設定していくことが大切になってくる。

スキルの中には日常生活の中で習得していくものもあるが、普段とは違う場所で家族と離れた状態により、自覚が芽生え身につくものもある。家族から受ける影響力も大きいのが、児童期以降は同年齢の子どもや年齢の近い存在ではあるがきょうだいとは違うお兄さんやお姉さんのような存在から受ける刺激による影響も大きいと考えられる。

また、発達障害をもっている子どもたちが同じ障害を持つ子どもたちのグループに参加することにより起きる変化があることが明らかになっている [9]。グループで活動することにより、望ましい行動への対応を一貫させた環境が提供できる。子どもたちはグループでの活動を通して、「自分ではできる」という体験をするだけでなく、「集団でやるから楽しい」といった体験をすることも可能となってくる。周りの大人の力を借りながらのグループ活動を通し同年代の子どもと関わり合うという経験は、他人と適切に関わることが難しかったり、友だち関係を作ることが難しかったりする発達障害をもつ子どもたちにとって、非常に意味があるものとなっている。

そこで今回の研究では、発達障害を持つ子どもが、家族と離れ同年齢の子どもたちと過ごし普段とは違う体験をする中で、プログラムを通して生活スキルを習得し、その習得したスキルを日常生活の中で継続的に再現することについて検討した。

Ⅱ 調査方法

1. 調査対象

2008年8月17日～21日「発達障害を持つ子どもとそのきょうだいたちのための漁業・海洋活動体験キャンプ」（愛知県知多郡日間賀島にて開催）に参加し、キャンプ中に「お手伝い」プログラムに取り組んだ子ども15名を調査対象とした。子どもたちは、自立に向けた生活スキルの取得を目標に、部屋の清掃や整理整頓など「お手伝い」という視点からプログラムを作成し課題に取り組んだ。「お手伝い」プログラムに参加した子どもの保護者に対しキャンプ前後の子どもの生活スキルに関するアンケート調査への協力を依頼した。今回、分析対象としたのは前後の生活スキルアンケート調査が回収できた9名（男子7名、女子2名）とした。

2. キャンプの概要とお手伝いプログラムの内容

(1) キャンプの概要

子どもたちは家族と離れ、様々な漁業・海洋体験（磯遊び、シュノーケリング、シーカヤック、

釣りなど)を通して、自己表現や自己理解、意欲の向上、積極性、他者理解、他人との協力などを体系的に身につけるために開催された。子どもたちにはそれぞれ発達障害についての知識があり、関わった経験のある大学生がボランティアスタッフとしてついた。また、ディレクターとして、発達障害児者の生涯発達を視野においた発達支援プログラムが作成できる医師や臨床心理士、言語聴覚士などが同行した。

キャンプに先立ち、保護者に「このキャンプに希望すること」を把握するためにアンケート調査を行った。その結果と発達障害を持つ子どもたちの日常生活の困難さに合わせて、午前中を中心に「お手伝い」「リラックス」「自己理解」などのグループに分かれてそれぞれのプログラムの中で課題に取り組んだ。

アンケートのよる「お手伝い」に関する希望は以下の通りであった。

(主なものを抜粋)

- ・自分の持ち物をきちんとかばんに片付けることができる。
- ・汚れものときれいなものとの区別が自分でできる。
- ・やるべきことを自分から進んで行動ができる。
- ・室内の掃除(ほうきを上手に使う、雑巾がけ、窓ふき)ができる。
- ・自分で流れを考えて行動する。

(例：朝起きる→顔洗いや着替えなど時間の把握ができる力をつけたい)

- ・荷物の管理、整理整頓ができる。
- ・衣服をたたむことができる。
- ・脱いだ服ときれいな服を分けて片付ける。
- ・自分の持ち物を把握してカバンから出し入れできる。
- ・自分の身の回りの品の整理ができる。
- ・指示を聞いて動く
- ・できない時にできないと相手に伝えることができる
- ・使ったものを元の場所に戻す
- ・活動に必要なものの準備ができる

(2) お手伝いプログラムスケジュール

*18日：お手伝いプログラム1日目

プログラムごとに分かれて集合をする。

お風呂に入ろうとしてファスナーを開けると中身が飛び出してしまう、汚いバックや、部屋の中で布団がぐちゃぐちゃになっている様子を絵で見せる。このような状態で困ることを考え、発表させる。その後、学生スタッフと一緒に部屋に戻り、自分の荷物や部屋の状況を確認する。できている、できていないなど、自分の現状を気づかせる。再び集合し、子どもたちに整理整頓や掃除、食事の前後のお手伝いができることは素敵なことであっていいことであり、このキャンプ

の間はこのような行動をする「お手伝いレンジャー」になることを任命する。お手伝いプログラムの冊子（資料）、バッジを配布する。

キャンプの間の「お手伝いレンジャー」の任務を具体的に子どもたちの前で行動し示す。

- ・カバンの中の片付け方（使ったものと使っていないものをわける。服をたたむ。タオルをたたむ。）
- ・布団のたたみ方（掛布団をたたむ。シーツをたたむ。敷布団をたたむ。まくら、たたんだ布団を押し入れにしまう。）
- ・洗濯の仕方（タオルを洗う。水着を洗う。絞る。干す）
- ・食事の前後のお手伝い（ご飯をよそってあるお茶碗を配膳する。お茶を注ぐ。食器を片付ける。台拭きをする。これらを分担し、自分の係の仕事をする）

部屋に戻り、各自のかばん、布団についてお手伝いレンジャーとしてふさわしい行動をしていく。できない場合は学生スタッフが丁寧に教える（Picture 1）。その後、集合場所に戻り、任務報告書（振り返りシート）を書く。ディレクターにチェックをしてもらい、シールをもらったらバッジの所定の位置に貼る。

この時間以外に食事の前後のお手伝いと洗濯の任務があることを確認する。食事の係を決める。食事の時間に各自の係の仕事をおこなうことを伝える。水着を洗う時間（海洋体験後）と場所を説明する。

できている子は他の子のお手伝いをし、できていない子はできるようにすることで、かっこよくて素敵なお手伝いレンジャーを目指して頑張ろうと投げかける。プログラムの最後にお手伝いレンジャーとして、サポートなく自分から進んで任務を遂行できるか確認テストを実施することを伝える。



Picture 1

＊19日：お手伝いプログラム2日目

プログラムごとに集合する。前日のおさらいをし、お手伝いレンジャーの任務を確認する。

各自部屋に戻り、持ち物、布団の整頓、洗濯（水着、体を洗うタオルが洗濯され、干した状態になっている）を確認する。学生スタッフは前日より進歩しているところを見つけ、褒める。さ

らにできる部分が増えるよう、支援する。

集合場所に戻り、任務報告書（振り返りシート）を書く。ディレクターにチェックをしてもらい、シールをもらったらバッジの所定の位置に貼る。

これ以外に食事の前後のお手伝い、洗濯の任務をする。学生スタッフおよびディレクターによる、支援、見守りがある。

***20日お手伝いプログラム3日目**

プログラムごとに集合する。確認テストをすることを告げ、各自部屋に戻る。子どもたちは自分一人で任務ができるかのチェックを受ける。一人ずつ任務をディレクターにみてもらう（Picture 2）。できたらシールをもらいバッジに貼る。再び集合し、各自ががんばったことを認め合う。首飾りをかけてもらい、お手伝いレンジャースーパー隊員に任命される（Picture 3）。このプログラム終了後もカッコいいお手伝いレンジャースーパー隊員として自宅で任務を遂行することを伝える。



Picture 2



Picture 3

3. 調査用紙の構成

アンケート調査用紙は、「整理整頓についてのアンケート」という形でプログラム参加前、参加1カ月後の子どもの自宅での様子について保護者に記入を依頼し実施した。質問項目は内容別に 1. 布団（掛布団をたたむ、敷布団をたたむ、シーツをたたむ、たたんだものをまとめておく）、2. 持ち物（タオルをたたむ、Tシャツをたたむ、ズボンをたたむ、下着をたたむ）、3. 片付け（たたんだものを種類ごとに分けて片付ける、すぐ使うものは取り出しやすいところに置く、明日着る服を前日に用意する、着た服は洗濯かごに入れる、洗濯機を使って洗濯をする、洗濯物を干す、洗濯物を取り込む）、4. 食事（おはしを並べる、ごはんをよそう、お茶を注ぐ、食べ終わった食器を洗い場まで持っていく、台ふきをする）、5. 掃除（雑巾で拭く、雑巾を洗う、雑巾を絞る、ほうきではく、ちりとりでゴミを取る、掃除機をかける）とした。

それぞれの項目に対して該当する程度を「しない・できない」、「声かけをすればできる」、「自分から進んでできる」の3件法で評定してもらった。それぞれの項目ごとに選択されたものによって「しない・できない」を0点、「声かけをすればできる」を1点、「自分から進んでできる」を2点とし、すべての項目の合計を生活スキル得点とした。また、内容別に得点を合計し、それぞれのスキル得点（布団スキル、持ち物スキル、片付けスキル、食事スキル、掃除スキル）とした。得点が高いほど、各々のスキルが身についていることを示す。

4. 倫理的配慮

保護者に調査の主旨、および守秘義務、協力の自由と拒否によって不利益をこうむらないことを口頭で説明した。その後保護者からのアンケート調査用紙の提出をもって同意を得た。また、調査結果の公表についても同時に許可を得た。

Ⅲ 結果

1. 生活スキル各項目の変化

(1) 各項目の度数分布

プログラム参加前と参加1カ月後の調査において 1. 布団（掛布団をたたむ、敷布団をたたむ、シーツをたたむ、たたんだものをまとめておく）、2. 持ち物（タオルをたたむ、Tシャツをたたむ、ズボンをたたむ、下着をたたむ）、3. 片付け（たたんだものを種類ごとに分けて片付ける、すぐ使うものは取り出しやすいところに置く、明日着る服を前日に用意する、着た服は洗濯かごに入れる、洗濯機を使って洗濯をする、洗濯物を干す、洗濯物を取り込む）、4. 食事（おはしを並べる、ごはんをよそう、お茶を注ぐ、食べ終わった食器を洗い場まで持っていく、台ふきをする）、5. 掃除（雑巾で拭く、雑巾を洗う、雑巾を絞る、ほうきではく、ちりとりでゴミを取る、掃除機をかける）の各項目に対し、「しな・できない」、「声かけをすればできる」、「自分から進んでできる」と回答した者の割合はTable 1に示す通りであった。

Table 1 生活スキル各項目の度数分布

		しない・できない		声をかけをすればできる		自分から進んでできる	
		N	%	N	%	N	%
掛布団をたたむ	前	6	66.7	3	33.3	0	0
	後	5	55.6	2	22.2	2	22.2
敷布団をたたむ	前	7	77.8	2	22.2	0	0
	後	6	66.7	2	22.2	1	11.1
シーツをたたむ	前	8	88.9	1	11.1	0	0
	後	8	88.9	1	11.1	0	0
たたんだものをまとめて置いておく	前	7	77.8	2	22.2	0	0
	後	7	77.8	1	11.1	1	11.1
タオルをたたむ	前	2	22.2	7	77.8	0	0
	後	2	22.2	5	55.6	2	22.2
Ｔシャツをたたむ	前	4	44.4	5	55.6	0	0
	後	2	22.2	5	55.6	2	22.2
ズボンをたたむ	前	2	22.2	7	77.8	0	0
	後	2	22.2	5	55.6	2	22.2
下着をたたむ	前	2	22.2	6	66.7	1	11.1
	後	2	22.2	5	55.6	2	22.2
たたんだものを種類ごとに分けて片付ける	前	4	44.4	5	55.6	0	0
	後	4	44.4	3	33.3	2	22.2
すぐ使うものは取り出しやすいところに置く	前	4	44.4	4	44.4	1	11.1
	後	4	44.4	3	33.3	2	22.2
明日着る服を前日に用意する	前	8	88.9	0	0	1	11.1
	後	6	66.7	2	22.2	1	11.1
着た服は洗濯かごに入れる	前	0	0	3	33.3	6	66.7
	後	0	0	3	33.3	6	66.7
洗濯機を使って洗濯をする	前	9	100	0	0	0	0
	後	7	77.8	2	22.2	0	0
洗濯物を干す	前	4	44.4	5	55.6	0	0
	後	3	33.3	6	66.7	0	0
洗濯物を取り込む	前	4	44.4	5	55.6	0	0
	後	3	33.3	6	66.7	0	0
おはしを並べる	前	3	33.3	3	33.3	3	33.3
	後	2	22.2	3	33.3	4	44.4
ごはんをよそう	前	3	33.3	4	44.4	2	22.2
	後	1	11.1	7	77.8	1	11.1
お茶を注ぐ	前	2	22.2	3	33.3	4	44.4
	後	2	22.2	4	44.4	3	33.3
食べ終わった食器を洗い場まで持っていく	前	1	11.1	2	22.2	6	66.7
	後	0	0	2	22.2	7	77.8
台ふきをする	前	4	44.4	4	44.4	1	11.1
	後	2	22.2	5	55.6	2	22.2
雑巾で拭く	前	5	55.6	4	44.4	0	0
	後	4	44.4	4	44.4	1	11.1
雑巾を洗う	前	6	66.7	3	33.3	0	0
	後	4	44.4	4	44.4	1	11.1
雑巾を絞る	前	6	66.7	3	33.3	0	0
	後	4	44.4	4	44.4	1	11.1
ほうきではく	前	6	66.7	3	33.3	0	0
	後	4	44.4	5	55.6	0	0
ちりとりでゴミを取る	前	7	77.8	2	22.2	0	0
	後	6	66.7	3	33.3	0	0
掃除機をかける	前	6	66.7	3	33.3	0	0
	後	2	22.2	5	55.6	2	22.2

(2) 各項目の得点平均値および標準偏差

各項目の得点の平均値 (SD) はTable 2に示す通りであった。

プログラム参加の前後における各々の項目得点について t 検定を行ったところ、「掛布団をたたむ」は t 値-2.000、有意確率0.081、「敷布団をたたむ」は t 値-1.512、有意確率0.169、「シーツをたたむ」は t 値-1.000、有意確率0.347、「たたんだものをまとめておく」は t 値-1.000、有意確率0.347、「タオルをたたむ」は t 値-1.512、有意確率0.169、「Ｔシャツをたたむ」は t 値-2.530、有意確率0.035、「ズボンをたたむ」は t 値-1.000、有意確率0.347、「下着をたたむ」は t 値-0.555、有意確率0.594、「たたんだものを種類ごとに分けて片付ける」は t 値-1.512、有意

Table 2 生活スキル各項目の平均値と標準偏差

	平均値 標準偏差			平均値 標準偏差	
掛布団をたたむ	前	0.33	洗濯物を干す	前	0.56
	後	0.67		後	0.67
敷布団をたたむ	前	0.22	洗濯物を取り込む	前	0.56
	後	0.44		後	0.67
シーツをたたむ	前	0.11	おはしを並べる	前	1.00
	後	0.22		後	1.22
たたんだものをまとめて置いておく	前	0.22	ごはんをよそう	前	0.89
	後	0.33		後	1.00
タオルをたたむ	前	0.78	お茶を注ぐ	前	1.22
	後	1.00		後	1.11
Tシャツをたたむ	前	0.56	食べ終わった食器を洗い場まで持っていく	前	1.56
	後	1.00		後	1.78
ズボンをたたむ	前	0.78	台ふきをする	前	0.67
	後	1.00		後	1.00
下着をたたむ	前	0.89	雑巾で拭く	前	0.44
	後	1.00		後	0.67
たたんだものを種類ごとに分けて片付ける	前	0.56	雑巾を洗う	前	0.33
	後	0.78		後	0.67
すぐ使うものは取り出しやすいところに置く	前	0.67	雑巾を絞る	前	0.33
	後	0.78		後	0.67
明日着る服を前日に用意する	前	0.22	ほうきではく	前	0.33
	後	0.44		後	0.56
着た服は洗濯かごに入れる	前	1.67	ちりとりでゴミを取る	前	0.22
	後	1.67		後	0.33
洗濯機を使って洗濯をする	前	0.00	掃除機をかける	前	0.33
	後	0.22		後	1.00

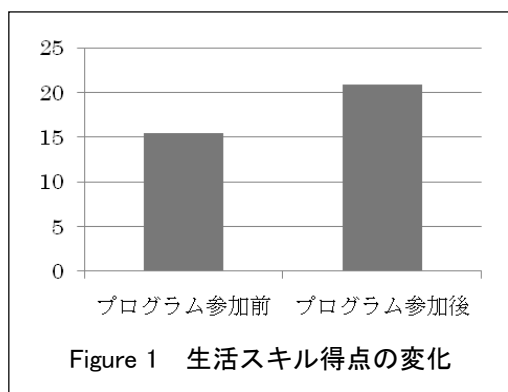
**p<.01,*p<.05

確率0.169、「すぐ使うものは取り出しやすいところに置く」はt値-1.000、有意確率0.347、「明日着る服を前日に用意する」はt値-1.512、有意確率0.169、「着た服は洗濯かごに入れる」はt値0.000、有意確率1.000、「洗濯機を使って洗濯をする」はt値-1.512、有意確率0.169、「洗濯物を干す」はt値-1.000、有意確率0.347、「洗濯物を取り込む」はt値-1.000、有意確率0.347、「おはしを並べる」はt値-1.000、有意確率0.347、「ごはんをよそう」はt値-0.555、有意確率0.594、「お茶を注ぐ」はt値1.000、有意確率0.347、「食べ終わった食器を洗い場まで持っていく」はt値-1.000、有意確率0.347、「台ふきをする」はt値-1.414、有意確率0.195、「雑巾で拭く」はt値-1.000、有意確率0.347、「雑巾を洗う」はt値-1.414、有意確率0.195、「雑巾を絞る」はt値-1.414、有意確率0.195、「ほうきではく」はt値-1.512、有意確率0.169、「ちりとり

でゴミを取る」は t 値-1.000、有意確率0.3473、「掃除機をかける」は t 値-4.000、有意確率0.004となった。したがって、「Tシャツをたたむ」と「掃除機をかける」において、プログラムの前後で有意に得点が上昇していた。

2. 生活スキル得点の変化

今回対象となった子ども達の生活スキル得点の平均値 (SD) は、プログラムに参加前15.44 (7.84)、参加1カ月後20.89 (10.49) (Figure 1) であった。Shapiro-Wilkの正規性の検定においてプログラム参加前の有意確率は0.797、参加後0.139であり、得点の分布は参加前、参加後ともにそれぞれ正規母集団と考えられる。

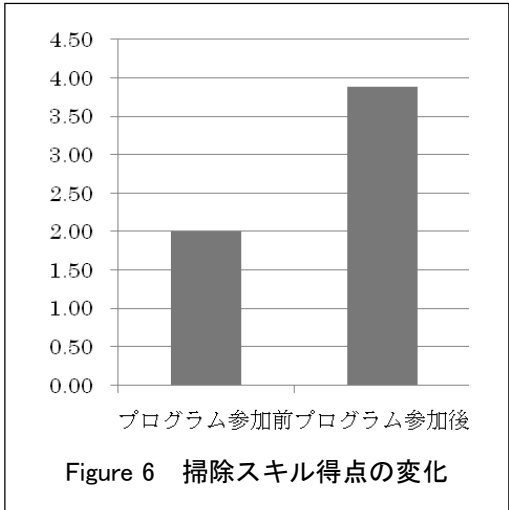
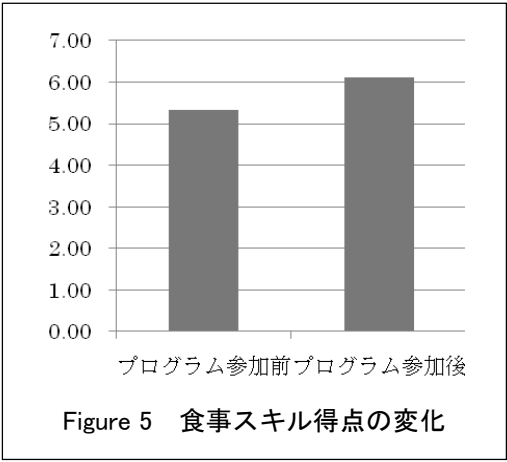
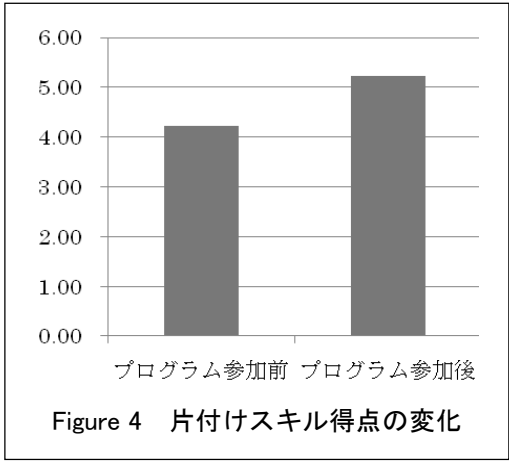
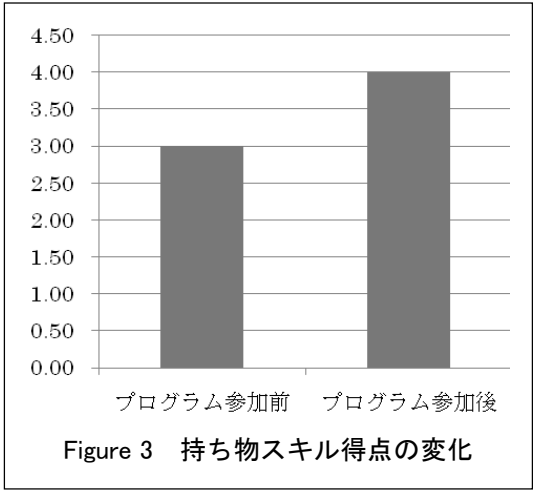
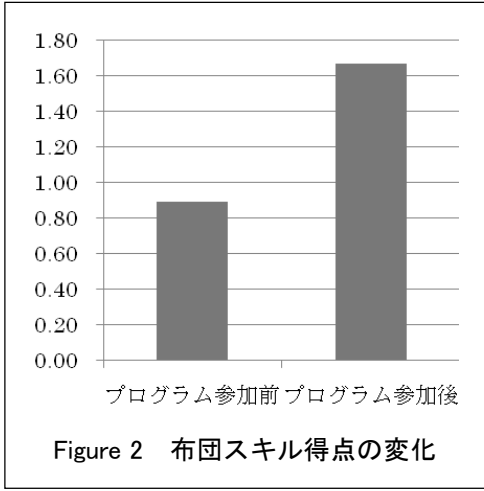


プログラムの前後における生活スキル得点について t 検定を行ったところ、 t 値-3.099、有意確率0.015となった。したがって、生活スキル得点はプログラムの前後で有意な得点の上昇がみられた。

3. 内容別スキル得点の変化

生活スキル内の内容別スキル得点の平均値 (SD) をFigure 2から6に示す。布団スキル得点はプログラムに参加前0.89 (1.53)、参加1カ月後1.67 (2.64) (Figure 2) であった。持ち物スキル得点はプログラムに参加前3.00 (1.80)、参加1カ月後4.00 (2.65) (Figure 3) であった。片付けスキル得点はプログラムに参加前4.22 (2.49)、参加1カ月後5.22 (2.64) (Figure 4) であった。食事スキル得点はプログラムに参加前5.33 (2.24)、参加1カ月後6.11 (2.42) (Figure 5) であった。掃除スキル得点のプログラムに参加前2.00 (1.94)、参加1カ月後3.89 (2.37) (Figure 6) であった。

プログラムの前後における各々のスキル得点について t 検定を行ったところ、布団スキル得点 t 値-1.673、有意確率0.133、持ち物スキル得点 t 値-1.549、有意確率0.160、片付けスキル得点 t 値-3.000、有意確率0.017、食事スキル得点 t 値-2.800、有意確率0.023、掃除スキル得点 t 値-2.507、有意確率0.037となった。したがって、片付けスキル得点、食事スキル得点、掃除スキル得点において、プログラムの前後で有意に得点が上昇していた。



IV 考察

本研究は発達障害をもつ子どもたちの生活スキル習得について検討する試みの一環として行われた研究である。発達障害をもつ子どもたちが家族と離れた生活の中で生活スキル習得のために構築されたプログラムに参加することによる効果を検討することを主な目的とした。

今回の結果から、発達障害をもつ子どもたちが習得している生活スキルはプログラム参加前に比べ参加後において増加していた。子どもたちは身につけた生活スキルをその後の日常生活でも活かして実行できていることが明らかになった。特に、片付けや食事の前後のお手伝い、掃除に関するスキルが習得されることが明らかになった。これらは日常生活を送る上で重要なスキルであり、発達障害をもつ子どもたちにとって、これらのスキルを向上させることはその後の人生においても大きな意味があるものと思われる。

今回のプログラムでは、初日に日常生活でよくありがちな望ましくない場合について提示し、今後の展開や望ましい行動を子どもたち自身で考えてもらった。その上で、子どもたちに、「片づいた状態、整理整頓することが自分にとっていいことである」、「自分でできることが大切である」ということを考えてもらい、今回のプログラムに参加する動機づけをした。実際やってみることで、どこまでできているかを改めてアセスメントし、信頼を寄せている学生スタッフとともに、あるいは見守られながら取り組んでいくことができた。また、「かっこいいお手伝いレンジャーになる」という仕組みを作ることで、子どもたちに隊員としての責任感を持たせるとともに、スキルを身につけるモチベーションを高めるようにできた。シールやメダルなどの「ご褒美」を活用することにより、楽しみながら活動することが可能となっていく。その結果、このキャンプでスキルを身につけ、その後、自宅でも、そのスキルを活かすことができるようになっていたものと思われる。

有意な差は出なかったものの、今回習得を試みた生活スキルにおいては「お茶を注ぐ」以外のすべてのスキルにおいて得点が上昇していた。つまり、プログラムに参加することによって、布団や持ち物の整理整頓や後片付け、掃除に関して継続して実行していけるスキルが身についていた。

今回の保護者のアンケート調査の記入で、「しない・できない」と回答した者の中には、そのような行動をする機会がない、あるいは、現在の生活では必要ないスキルなので、「しない」と選択しているものも存在した。(例：ベット使用者の布団をたたむ、シーツをたたむなど)この点に関しては、今後、より、子どもたちの将来を見据え必要とされるスキルの取得に向けてプログラムを考えていく必要がある。

また、保護者のアンケートの中に、自宅では家族がおこなっていて「この子には無理だと決めて、経験させていなかった」ことが、このプログラムでの経験をきっかけに、日常生活のなかで本人にやらせてみようと思うきっかけになったという回答もあった。機会が提供されなければスキルの習得自体、不可能であると考えられる。そのような環境の中でスキルの習得に向けてプログラムを実施したことは、子どもたちにとっても家族にとっても新しい発見となり、子どもたち

が将来に向け社会参加するきっかけを提供することになったものと思われる。

同様の活動で発達障害をもつ子どもたちのこだわりに関して、多くの場合、こだわり行動があるがゆえに日常生活が困難に感じてしまう子どもたちも多いが、このこだわりを、適応的なこだわりに変えるためには、適応行動を見つけほめることが大事であることが明らかになっている [10]。発達障害のなかでも特にアスペルガー症候群の子どもたちは、守るべきルールや望ましい行動が「こだわり」となることにより、日常生活をよりよく過ごすことができるようになっていくことが分かってきている。

発達障害をもつ子どもたちの発達支援は、日常での様々な形でのスキルの習得などから構成される。「生活するさまざまな場面に訓練されたスキルが般化することによって、生活の選択性、すなわち本人の要求や必要に応じて自ら利用できる生活環境の種類や頻度が拡大できる」とした研究もある [11]。今回のプログラムに参加することにより、生活スキルの習得が可能となり社会的自立へのプロセスを示すことができた。また、課題を通して他の子どもたちと協力したり、役割分担したりする機会を体験することができ、対人関係や生活空間の広がりを可能にするものとなった。

V 終わりに

今回の調査の結果から、発達障害を持つ子どもたちにとって、家族と離れた場面において構成されたプログラムに参加することは自立に向けた生活スキルの習得において意味のあることが明らかにされた。

しかしながら具体的な行動をみると、獲得されるスキルもあれば、変化のない、つまりはプログラムに参加をしてもその後の日常生活において般化されていないスキルもあることが明らかになった。このことは、今後の研究において発達障害をもつ子どもたちの中には、何らかの制約を抱えており、プログラムに参加するのみではスキルの習得に至らない者がいるという視点から発達支援をしていかなければいけないということを示唆している。

また、保護者と同居している子どもたちでは、スキルの獲得に特に保護者とのかかわりが重要となる [6] [12]。さらに、保護者から子どもたちに対して、行動を実行する機会を提供し続けること重要性があげられている [4]。そのため、継続的な支援の実施を促す保護者支援の検討が重要と考えられる。

今後の課題として発達障害をもつ子どもの日常生活に広い範囲で般化する生活スキルの指導法やプログラムの開発の検討が挙げられる。加えて、習得したスキルの定着についての長期的な経過の把握やスキルに関して十分な維持が達成されるための環境変数を分析することが課題として挙げられる。

*今回の活動はNPO法人アスペ・エルデの会の協力による「発達障害を持つ子どもとそのきょうだいたちのための漁業・海洋活動体験プログラム」(2008年度子どもゆめ基金助成事業)のなかで行われた調査研究である。

引用文献

- [1] Snell, M. E. & Browder, D. M. “Community-referenced instruction: Research and issues” Journal of The Association for Person with Severe Handicaps, 11, 1-11, 1986.
- [2] Snell, M. E. & Browder, D. M. “Domestic and community skills” In M. E. Snell(Ed.), Systematic instruction of person with severe handicaps. Merrill, Columbus, Ohio, 390-434, 1987.
- [3] 青木美和・山本淳一「発達障害生徒における写真カードを用いた家庭生活スキルの形成－親指導プログラムの検討－」行動分析学研究、10巻2号、1996年、pp.106-117.
- [4] 神山努・野呂文行「発達に障害がある児童・生徒における地域・家庭生活スキルの日常生活への自発的開始・般化の検討－保護者による記録に基づいた保護者支援による介入－」特殊教育学研究、48巻2号、2010年、pp.85-96.
- [5] 依田雅美・清水直治・氏森英亜「精神遅滞児における買物スキルの形成と般化に関する研究－実際場面とシミュレーション場面での訓練の分析－」行動分析学研究、9巻1号、1996年、pp.22-28.
- [6] 菅野千晶・羽鳥裕子・井上雅彦・小林重雄「自閉症生徒の買物指導と日常生活における般化および維持に関する検討」特殊教育学研究、33巻3号、1995年、pp.33-38.
- [7] 福永顕・大久保賢一・井上雅彦「自閉症生徒における携帯電話の指導に関する研究－現実場面への般化を促す指導方略の検討－」特殊教育学研究、43巻2号、2005年、pp.119-129.
- [8] 湯汲英史・武藤英夫・田宮正子『発達につまづきを持つ子と身辺自立』大揚社、2008年、pp.31-36.
- [9] 片岡尚子「グループ活動のなかで、ABAの発想で子どものスキルをのばすには」アスペハート、Vol.19、2008年、pp.32-36.
- [10] 内田裕之・辻井正次「自閉症スペクトラムの困ったこだわり行動への対処法」アスペハート、Vol.31、2012年、pp.50-53.
- [11] 渡部匡隆・山口とし江・上松武・小林重雄「自閉症生徒における代表例教授法を用いた支払スキルの形成－複数店舗への般化の検討」特殊教育学研究、36巻4号、1999年、pp.59-69.
- [12] 井上雅彦・井上暁子・菅野千晶「自閉症者に対する地域生活技能援助教室－料理スキル獲得による日常場面の料理行動の変容について－」行動分析学研究、8巻、1995年、pp.69-81.

受理日 平成24年9月29日

資料（お手伝いプログラム冊子の一部を抜粋）

● もくじ ●

◎ プログラムの中でがんばろう！！

せいりせい ぶとん
整理整とん 1（お布団をたたもう！）

せいりせい じぶん その せい
整理整とん 2（自分の物を整とんしよう！）

せいかつ
◎ 生活の中でがんばろう！！

せんたく じぶん のびん みる
お洗濯（自分の水着を洗おう！）

しょくじ かりや さくわし き とく
食事のときの係（役割を決めて取り組もう！）

せいのう
◎ 生活の中のマナー（しっかり守ろう）

アンパンマンぬりえ

せいりせい ぶとん
◎ 整理整とん 1（お布団をたたもう！） ◎

へや
○お部屋の中でのにんむ

あさ お ぶとん
朝、起きたら布団を上げよう！

① かけ布団をたたむ

② しき布団をたたむ

③ 布団をまとめておいておく
・部屋のすみに、みんなの布団をかためておこう
・できた子は、みんなを手伝ってあげよう！

● おてつだいプログラムのおやくそく ●

（みんなやること）

◎ いいことをいっぱいしよう！

じぶん じぶん
◎ 自分のことは自分でやろう！

◎ お兄さん、お姉さんの言うことはしっかり聞こう！

（中学生の子がとくにながらぶこと）

◎ 先生におつかいをたのまれるよ。しっかりやろう！

おやくそくをしっかりもって、楽しい合宿にしよう！

にんむ ほうごしょ ぶん
にんむ報告書（にんむができたならマルを書こう！）

① かけ布団をたたむ

8月18日	8月19日	8月20日

② しき布団をたたむ

8月18日	8月19日	8月20日

③ 布団をまとめておいておく

8月18日	8月19日	8月20日

ディレクターの先生にチェックしてもらおう！

8月18日	8月19日	8月20日

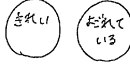
☆☆☆家に帰ってからのにんむ☆☆☆
お母さんに教えてもらって、布団を整えよう！

◎ 整理整とん 2 (自分の物を整とんしよう!) ◎

自分の持ち物を管理するにんむ

かばんの中に入っているものを整とんしよう

- ① 分別する
- 使ったもの(汚れたもの)と、使っていないもの(きれいなもの)を分ける
 - タオル、下着、洋服の仲間に分ける



- ② タオル、洋服をたたむ
- タオルのたたみ方を練習しよう!
 - 洋服、下着のたたみ方を練習しよう!

- ③カバンにしまう
- きれいなものと汚れたものをそれぞれ袋に入れる
かばんの中におさまるようにしまう
すぐに使うものは上の方にしまう

★★★ 家に帰ってからのにんむ ★★★
洗濯物を、自分でたんでみよう!

◎ お洗濯 (自分の水着を洗おう!) ◎

汚れたものを自分で洗うにんむ

使った水着を洗おう!

- いつ洗う? ... お風呂から出たら
- どこで洗う? ... 足洗い場で

(洗いかた)

①水着を水でぬらす

②ごしごしとこする

③水ですすぐ

④ぎゅっとしぼる

- じょうずにしぼれるかな?
- しぼったときに水が出てこなくなるまで、やろう!

⑤部屋でほす

広げてほそう!

★★★ 家に帰ってからのにんむ ★★★
汚れたものを、自分で洗おう!

にんむ報告書 (にんむができればマルを書こう!)

① 分別は、上手にできたかな?

8月18日	8月19日	8月20日

② タオル、洋服、下着をたたむ

8月18日	8月19日	8月20日

③ かばんにしまう

8月18日	8月19日	8月20日

ディレクターの先生にチェックしてもらおう!

8月18日	8月19日	8月20日

にんむ報告書 (にんむができればマルを書こう!)

水着は、じょうずに洗えたかな?

8月18日	8月19日	8月20日

スタッフのお兄さん・お姉さんにチェックしてもらおう!

8月18日	8月19日	8月20日

◎ 食事のときの係（役割を決めて取り組もう！） ◎

にんむ報告書（にんむができればマルを書こう！）

◎ 食事のときに、係の仕事をしっかりやろう！

係の仕事は、上手にできたかな？

（ 食事の前 ）

- ・ご飯のよそってあるおちゃわんをはいげんする
- ・お茶をそそぐ

	8月18日	8月19日	8月20日	8月21日
朝				
昼				
夜				

（ 食事の後 ）

- ・食事をかたづける
- ・台ふきをする

スタッフのお兄さん・お姉さんにチェックしてもらおう！

☆上の係から、自分がどの係をやるか、決めよう！
☆決めたら、下のらんに書こう！

	8月18日	8月19日	8月20日	8月21日

ほくは、わたしは…

…係をやる！！

★★★ 家に帰ってからのにんむ ★★★
お母さんとにんむを決めて、食事のお手伝いにとりくもう！

日間賀島合宿 お手伝いレクチャー さいしゅうレポート

○ この3日間で、整理整頓、食事のときの用意、お洗濯は
できるようになりましたか？できたことは何ですか？

○ 家に帰ってから、お手伝いレクチャーとして
どんなお手伝いをがんばりたいですか？

これから、お家の中で、いっぱいお手伝いをしよう！
みんながお手伝いレクチャーとしてかつやくするのを
先生たちはきたいしているよ！